連載Ⅰ
当財団専門委員
私の研究と観光
第６回

自然保護地域における保全と利用

公立大学法人 国際教養大学　アジア地域研究連携機構　機構長・教授　熊谷　嘉隆

自然保全と利用

筆者の専門は「自然保護地域の管理運営」である。具体的には国立公園などに代表される自然保護地域内の景観・生態系保全と登山・ハイキング、渓流釣りなどのアウトドアレクリエーション利用をどのように両立させるのか、を勉強している。

きっかけ

30年以上前の話になるが筆者は中部山岳国立公園内の槍ヶ岳から燕岳を結ぶ通称、表銀座の中間地点にあるヒュッテ西岳に勤務していた。山小屋の仕事は登山客の食事の準備、布団干し、ゴミ・屎尿処理、登山道の整備・保守、遭難時の初動対応、など多岐に渡り貴重な体験を積んだのだが、その際、考えさせられたのは「登山者の満足」と「登山者による環境負荷」そして「自然保護地域の管理運営のあり方」であった。繁忙期ともなれば上高地もしくは燕岳から槍ヶ岳を目指す登山者で山小屋は常に満員である。ちなみに山小屋に「定員」というものは無く、天候が崩れれば無制限に登山者を受け入れる。当時、ヒュッテ西岳の定員は86名であったが、筆者在職中、1日110名ほどの登山者の宿泊を受け入れたことがある。その際、登山者は一畳ほどの布団に3名（一人ずつ頭と足を交互）就寝する。山小屋寝室内は雨嵐による湿度、登山者の汗で蒸せており、快適さとは程遠い環境で熟睡など不可能である。しかしこのような状況下でも登山客から不満や文句がでることは一切なく、翌朝には多くの宿泊客が我々に感謝し小屋を後にする。また、混雑は山小屋だけでなく、槍ヶ岳の肩から山頂に向かうルートは長蛇の列となり、本来30分もあれば登れるところを混雑時には3倍以上の時間がかかる。登山者は辛抱強く順番を待ちながら山頂を目指し、そして人とすれ違いながら鎖場を下山するのである。多くの登山者は多大な時間とお金を使って雄大な山岳景観と静寂、そして原生的体験を期待して入山するのであろうが、現実は山小屋と登山道の混雑、そして静寂とは程遠い体験を余儀なくされる。しかし、多くの登山者は翌年以降も似たような山行をするのだが、筆者はこのような登山者における「期待と現実のギャップの克服」の心理的メカニズムに興味をもった。

山小屋のゴミ・屎尿処理であるが、可燃物はドラム缶をくりぬいた簡易焼却炉で従業員が黒い煙を出しながら焼却し、燃えかすは山小屋敷地内に埋める。屎尿処理は小屋閉鎖の直前10月最終週に便所のタンクに1シーズン分溜めたものを掻き出し、消毒剤と共に谷に一斉に流すのであった。（現在は二つとも行われていない）。登山者に休息と安全を提供する山小屋は一方でこのような環境負荷の源にもなっていたわけで、これらの観察・経験が「自然保護地域の管理運営のあり方」を考えるきっかけになった。

山小屋勤務の後、世界中から多くの登山隊とトレッカーを魅了するネパールヒマラヤのアンナプルナとエベレスト方面（国立公園地域）に行く機会があった。雄大な景色と途上の集落のたたずまいや人々の民俗文化に触れながら、2ヶ月余りを山中で過ごした。そこで目にしたのは登山者やトレッカーが地域にもたらす経済波及

効果とそれを基に整備した学校、病院、橋、道路といった社会インフラの充実、観光産業に携わる人々と一般住民との意識・生活様式、生活水準の乖離、異文化と遭遇することによって影響を受けた若者達の伝統的生活様式への眼差しの変化、登山者・トレッカーを支える薪・水の確保と食料増産の為の森林伐採や開墾地の開拓といった環境負荷、などであり、この観察・体験も当該分野の研究に進むきっかけになった。

留学

１９９０年より米国の州立モンタナ大学・森林学部アウトドアーレクリーション学科で自然保護地域の管理運営を学ぶため渡米した。今でも印象に残っているのがこの学科専攻生の必修であるIntroduction to Outdoor Recreation Managementの講義初日に担当教員が「アウトドアーレクリーション管理運営において最も大事なのは利用者の満足（User satisfaction）をどう高めるかである。」との指摘であった。当初、この分野において一番重要なのは自然保全であると信じていた筆者にとって、これはショックであった。勉強を進めるうちに「利用者の満足」はその人の心身の健康、創造的仕事、家族・友人との絆の深化、豊かな人生、等の社会福祉政策にも寄与し「満足した利用者」を増やすことによって自然保護地域の社会・政策的意義がより広く認知され、ひいては当該分野の継続的予算の確保に繋がり、それが健全な自然保護地域管理運営にも資する、との循環図式が見えてきたのである。また、「利用者の満足」は多様な利用者に応える「多様な機会」が自然保護地域内で提供されていること、利用者による環境負荷は利用者数のみが説明変数でなく、利用類型、利用者のマナー、利用の季節・タイミング、利用地の社会的・生態的特性、などの要素が相互に絡み合って変動すること、などを学んだ。

今、そしてこれから

アメリカ留学と研究生活を２００４年に終え、現在の職場に奉職した。帰国当初は当該分野の「先進地」で学んだことを我が国の自然公園に応用する、と意気込んでいたが、その法制度、土地所有、ガバナンス、管理運営執行可能各種資源等において事情が異なる我が国での直接的応用は非現実的であると認識せざるを得ず、まずは謙虚に勉強しなおそうと決意した。帰国直後の２００４年に国立公園研究に携る国内有志と共に「自然公園研究会」を立ち上げ（現在、事務局はＪＴＢＦ）、今まで、この研究会メンバーが中心となって、我が国の地域制自然公園の有効性評価や協働型管理運営のあり方（環境省主催の検討委員会）、沖縄県の観光収容力の検討（沖縄県主催、ＪＴＢＦ共催）、自然保護地域の評価、計画、管理、合意形成手法の開発（環境研究総合推進費）などのプロジェクトを推進してきた。これらの研究に一貫している問題意識は「自然保護地域おける保全と利用（主に観光行動）のバランス」である。

現在、我が国では「明日の日本を支える観光ビジョン」に基づき国立公園をグローバルスタンダードで見直し、より多くの国外観光客を魅了するための「満喫プロジェクト」が進められている。ここでも今までの経験値を活かして国立公園の単なる観光地化ではなく「保全と利用のバランス」の図られた世界水準の「ナショナルパーク」化を目指し、関係者と意見交換を図りつつ研究成果を施策に反映させればと思っている。

（くまがい　よしたか）

熊谷 嘉隆（くまがい よしたか）
１９６０年生まれ　札幌市出身。公立大学法人国際教養大学アジア地域研究連携機構　機構長・教授。１９９７年モンタナ大学森林学部大学院自然公園管理学専攻修士課程修了、２００１年オレゴン州立大学森林学部森林資源学科森林社会科学専攻博士課程修了。ワシントン州立大学農業家政学部自然資源科学学科博士研究員、２００４年から国際教養大学国際教養学部　基盤教育　社会科学　助教授、２００７年教授、２０１４年より現職。国際自然保護連合・世界保護地域委員会副委員長―東アジア地域担当／日本委員会委員長を兼任。主な著作に『グリーン・ツーリズム的活動の展開と地域住民気質の変容 ― 北秋田市阿仁地区の事例から』年報村落社会研究43号（２００８）、"No Need to Reinvent the Wheel: Applying Existing Social Science Theories to Wildfire, *In* People, Fire, and Forests. *Oregon State University Press* ほか。